シリーズ
時代を支える
女性医師
12

武曾 恵理

公益財団法人田附興風会医学研究所 副所長
公益財団法人田附興風会医学研究所
北野病院腎臓内科主任部長

―研究と臨床の両輪で走り続けてきた 腎臓内科のトップランナー―

聞き手・文：ドクターズマガジン編集部
写真：稲垣純也

長期にわたる療養生活 患者ひとりでは走らせない

「私はあなたの人生に伴走していきますよ」

この言葉は北野病院腎臓内科主任部長を務める武曾恵理氏が、患者に示す姿勢だという。

腎臓の疾患は治りにくく、人によっては〝人生の一部〟といえるほどに長年付き合っていかなければならない。そして体調がすぐれない場合はもちろん、目に見える症状が出ていなくても治療は続く。療養生活を余儀なくされる患者の気持ちはいかばかりか。定期的な通院や投薬を煩わしく思い、時に投げ出したくなることもあるはずだ。

そんな患者たちに、武曾氏の自信に満ちた話し振りと包容力のある雰囲気は、大きな安心感を与えているように思われる。武曾先生にすべてを任せればきっと大丈夫――そう思わせる力が、武曾氏にはあるのだ。

説明は要所を押さえて そして何より〝シンプル〟に

武曾氏は大学を卒業してからすぐに京都市立病院内科のレジデントになった。最初の目的は、すべての科を診られる知識、技術を身につけることだったが、いろいろな科を回るうちに武曾氏は腎臓に興味を持ち始めた。

「ただ、腎臓の専門医がいらっしゃいま

「Doctor's Magazine　2013年7月号」（発行:㈱メディカル・プリンシプル社）掲載記事
※本記事内容は発行元の許可を得て掲載しております。但し、他への転載等は許可されておりません。

せんでしたから、物足りなくて。そんな矢先、ネフローゼ症候群の患者さんがみるみるうちに悪化し、透析が必要な状態になってしまったのを目の当たりにしたんです」

そのときのやり切れなさをきっかけに、武曾氏は京都大学医学部附属病院第三内科で腎生検を勉強し始めた。武曾氏は病理学的検査という切り口から、腎臓内科について学び始めたのだ。

「自信を持って患者さんに、病気について説明できるようになったのは、自分で検査して診断をつけているからだと思うのです」

また、武曾氏の説明は、非常にわかりやすいと患者から定評がある。ほんの5分程度の診察時間で、学術用語を使わず、しかし、十分に説明し尽くす。『体の悪い毒素を作らないように、また、ためないようにする』『ここの通りを良くする』と、非常にシンプルな言葉で説明するのがポイントだという。

現在の病状を知り、今後の治療方針を理解することは、患者自身が治療を続けるモチベーションを保つことにつながる。そして、シンプルな説明とともに、診察の際に心掛けていることがもうひとつある。

「毎回でないにせよ、患者さんに『ずっと付き合って行きますよ。あなたの人生に伴走していきますから、頑張りましょう』ということを伝えます。もちろん言葉だけでなく常に態度でも表して。そうして私の思いを受け取った患者さんは、きちんと病院に通い続けてくださいますね」

常に一緒に走ることだけが〝伴走〟ではない

武曾氏の〝伴走する〟という言葉は、ただ、武曾氏自身が診察し続けるということではない。

「北野病院と地域の開業医とのネットワークであるK2-netという体制を2008年にスタートさせました。毎月の診察は地域の開業医が受け持ち、異常があれば、すぐにこちらに来院してもらいます。そして何も異常がない場合でも、半年に1度はこちらで診させてもらいます」

武曾氏が毎月診ていなくても、いざというときには応じられるという体制は患者の安心につながっているだろう。また腎臓の専門医でない開業医にとっても、専門医にすぐに相談でき、二人三脚で患者を診ていけるという点で心強いはずだ。

武曾氏自身が直接、患者と接する機会が少なくても、間接的に長く付き合っていく。そして、緊急時には、必ず応じる。それができる環境があるからこその〝伴走〟なのだ。

未来を描き築いていくひとり

武曾氏は、公益財団法人田附興風会医学研究所の副所長でもある。医学研究所は京都大学とともに臨床研究を進めており、腎臓学分野においては今、iPS細胞を用いた共同研究をしているそうだ。

「患者さんの皮膚細胞からiPS細胞を作り、疾患部分の細胞へと分化誘導します。それをもとに病因、発症メカニズムを研究することができますし、薬剤の効果を簡単に評価することもできます」

もちろん、それ以外の研究もかなり進んでおり、IgA腎症、巣状糸球体硬化症疾患などの進行の過程や、治療の機序については武曾氏自身もモデル動物を開発したりすることでかなり解明されてきた。だが、なかなか解き明かせない部分があると武曾氏は語る。

「腎炎が発症してからのメカニズムはわかってきましたが、どうやって発症するか、についてはまだわかっておりません。これがわかれば、腎炎そのものをこの世からなくすことに一歩近づくでしょう。ただ、そこに至るまでには、まだ時間はかかりそうですね」

長年、最先端の研究と臨床を両輪でやり続けてきた武曾氏だからこそ、遠くの未来まで見通せるのだろう。そして見通すだけではなく、今、武曾氏は未来の医療の基盤を作っている。

緊張感のある場で次世代を担う医師を育てる

現在、武曾氏は厚生労働省難治性疾患克服事業の進行性腎障害調査研究班など

PROFILE

むそう・えり

1976年　京都府立医科大学卒業
1976年　京都市立病院内科レジデント
1980年　京都大学医学部付属病院第三内科医員
1984年　フランス国政府給費留学生
　　フランス国立科学研究所（CNRS）客員研究員として
　　パリ市ネッカー病院研究員勤務
1986年　京都大学医学部第三内科のち循環病態学教室助手、講師
2001年　公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院腎臓内科部長
　　（後主任部長）
2003年　公益財団法人田附興風会医学研究所副所長
　　（腎臓内科部長兼任）
　　京都大学大学院医学研究科非常勤講師（兼任）
2005年　京都大学医学部臨床教授（兼任）
2008年　京都府立医科大学非常勤講師（兼任）
2010年　中華人民共和国・復旦大学上海医学院客員教授（兼任）

●役職等　日本腎臓学会理事　ほか

公の取り組みにも参加し、さまざまな疾患のガイドライン作りにもたずさわっている。

武曾氏は、研究班の班会議に参加する時には、いつも若手医師を連れて行くそうだ。

「中堅以上の医師が班会議に参加しますが、そこで使うデータは若手医師に取らせていることが多いのではないでしょうか。でも、実際に現場で手を動かしている若手医師こそが班会議に出席して、自分の提出したデータがどのように使われているのかを知るようになれば、若手医師の意識がかなり変わるのではないでしょうか」

間違ったデータをもとにガイドラインが作られてしまえば、現場は混乱し、多くの患者が苦しむようなことも起こり得る。患者に振り返ってくるという危機感を若手医師が持つことで、データの質は上がっていくだろう。そして、若手医師のモチベーションが高まり、より高い知識と技術を持った医師が育つことが期待できるのだ。

その他、国際共同治験についても、武曾氏は若手医師にたずさわるチャンスを与えているそうだ。

「今は、腎臓内科の次世代を担っていく人たちを育てていくことに力を注いでいます。もちろん私を含めて経験のある医師がしっかりと支援しますから、若手医師にはぜひ積極的に参加してほしいですね」

知識と技術 そして懐の深さ

長年、研究と臨床の両方の場で活躍してきた武曾氏に、腎臓内科の面白み、やりがいについて尋ねてみた。

「腎臓の疾患は、病状がゆっくりと変わっていくものです。でも、『これは！』という変化は絶対に見逃してはいけません。例えるなら、〝魚釣り〟でしょうか。端からはゆったり水面を眺めているように見えても、魚が針にかかった瞬間にパッと反応して竿をあげなければならない。重要な一瞬を見逃さないためには、常に緊張して観察し続けなくてはいけないのですね。その積み重ねは醍醐味のひとつだと私は思います」

長い目で患者を診ていかなければならない腎臓内科医は、多くの科の中でもとりわけ全人的な視点が重要だといえよう。疾患だけではなく心を含めた全身を、集中力を持って診ていくこと。それは、知識、技術だけではなく、武曾氏のように患者を温かく受け止める懐の深さが大切なのではないだろうか。

「腎臓の疾患は、完治という明らかなゴールがなかなか見えません。それは患者さんにとってとても辛いことでしょう。それでもご自身の病気をきちんと受け入れ、治療をしながら前向きに生きることができるようになれば、私はとてもうれしく思います。腎臓内科医の達成感を感じることのひとつでしょうね」